

カウンセリング研修② 簡易講演録

■実施日時

令和7年8月4日（月）13:30～16:30

■開催形式

対面：リロの会議室 COMFORT 新宿

■講師

富田久枝 氏（千葉大学名誉教授）

■テーマ

教員が使えるカウンセリング技術 応用編

■主催

公益社団法人東京都専修学校各種学校協会

本研修では、長年にわたり教育現場におけるカウンセリング支援や特別支援教育に携わってきた富田久枝氏を講師に迎え、学校現場におけるカウンセリングの基本的な考え方と技法、そして教員として求められる対人支援の姿勢について、4人1組のグループワーク等を用いながらご講義いただきました。

冒頭、富田氏は「教育は理論ではなく実践。グループでの演習を通じ、目の前の子どもたちに具体的に何ができるかを感じ取ってほしい」と呼びかけました。前半は講義と演習を交え、自己紹介の工夫やグループでの絵の共同制作など、教育現場で活用できる実践的アプローチを体験しました。また、傾聴や受容、非言語的コミュニケーションなどの技法も学びました。

後半では、自己理解を深める心理テスト「エゴグラム」を体験した後、事前に参加者から寄せられた悩みを基に5つのテーマでグループディスカッションを行いました。各グループが意見をまとめ、以下のような発表がありました。

① 異文化的背景を持つ学生の不調・再発への対応

留学生のメンタル不調は、母国での生活習慣や価値観と日本での生活とのギャップから生じやすいとの指摘がありました。日本で学ぶ意義を丁寧に説明しつつ、出席率が低下している学生には毎月面談を実施するなどフォローを強化。改善が見られない場合には、保護者への責任も踏まえて帰国を促すケースも必要とされました。

② グレーゾーンの学生に対する対応

学生本人が「困っている」と自覚しているかを見極めることから支援を始めるべきとの意見が出ました。医療機関を勧めることは決めつけにつながる可能性もあるため慎重に対応する必要があります。保護者には欠席や成績などの客観的事実を伝え、協力を得ながら、学生が望んで進学した環境をできる限り良い方向に導くサポートを重視するとの発表がありました。

③ 大人の学生への接し方と「その後」を見据えた支援

まずは学生話をじっくり聴き、その世界観を理解することが大切とされました。非合理的な「〇〇のせいでうまくいかない」といった考えには、信頼関係を築いたうえでアイメッセージを用いて伝え返すことが有効とされました。背景や信念を理解しつつ、納得感を持って学習環境に適応できるように働きかけることが重要とされました。

④ やる気がなく、理由も話さない学生への対応

最初は反応が薄くても、継続的に関わることで信頼関係が築けることがあるとの意見が出ました。アルバイトによる疲弊など経済的事情を抱える学生も多いため、休学や生活の工夫など幅広い選択肢を提示し、学生自身が将来を主体的に考えられるよう支援することが大切とされました。学校を「居場所」として提供する視点の重要性も強調されました。

⑤ 時間的に平等な対応が難しい場合の対応

緊急性の判断が難しい場合もあるため、一人で抱え込まず、複数の教員で対応にあたることが有効とされました。可能であれば事前にメール等で相談内容を把握し、優先順位を整理した上で学生に寄り添うことが望ましいとの意見がまとめられました。

最後に富田氏は、「対応の最中は苦労も多いが、振り返ると教員自身も成長している。1人で抱え込まず仲間とともに経験を血肉にしてほしい」と参加者へエールを送りました。